

ACL プロジェクト活動報告

プロジェクト代表者氏名・所属：黒石いずみ 総合文化政策学部

研究プロジェクト名称：地域の生活空間のフィールドと語りの調査、それを元にした作品の公開による地域文化研究・教育の手法と理論の研究

プロジェクトの内容：

被災地の気仙沼や財政支援市の新庄市で行なっている生活文化と地域振興に関する調査で、本年は防潮堤による生活空間の変容、農村部における農業の衰退に伴う地域意識の変容について焦点を当てて活動を行なっている。その中で地域の歴史資源の掘り起こしと現在の空間との関係の見直し、様々な地域の様々な立場の人による語りの総合的把握と空間体験の比較、特に日常生活の記憶の意味に関する考察が、地域文化やコミュニティの問題の理解と再生に役立つことを理解した。またこの活動で、総文のメンバーの声を現地に届ける方法としてラジオや映像の方法が有効であることを確認している。

そこで本年のプロジェクトとしては、8月の気仙沼調査合宿を元にした9月の作品公開と10月の気仙沼ラジオ放送への参加、8月の新庄合宿を元にした11月の青学祭での作品公開と研究発表、2020年2月に現地で行う活動報告と市民交流などを通して、5月から8月までのフィールドワークによる地域調査と交流の実践的活動の記録、語りの記録と歴史的・社会的問題との相対的な理解、地域空間と生活文化の総合的な構成の理解について考察し、総合文化政策学の教育手法と理論、実践調査の方法論を検討する。

フィールドワーク、現地調査を教育と研究を併存させる形式で行うことにおける意味と限界：

まず本企画の詳細を説明する前に、この企画を行う上での問題意識の説明を行いたい。地域や都市部の生活空間を対象として、学生たちとともに都市建築学や地理学、民俗学的・考現学的手法による、地域文化とコミュニティの調査を継続的に行なっている。現地での活動を通して学ぶことや、フィールドワークを通しての気づきを教育や研究に反映させることは、近年様々な領域や学年において重視されている。著者は都市や地方の研究、住まいや生活様式における人々の振る舞いや社会的仕組みと空間の関係を長く研究して来たので、この現場重視型の教育手法は、自分の教育手法としても違和感がない。しかしその一方で、そのような教育手法や調査手法が抱える限界について、下記のように認識している。それはまず調査として

1. インタビューの作法
2. 現地調査の手法
3. 科学的根拠として資料を整理する方法
4. 調査対象と目的、参考とすべき情報や理論の枠組みの設定
5. あるいは外部の商業的な利益へ取り込まれてしまうことへの危険の問題などの問題である。

また研究と教育の両面に関連する問題としても、

6. 現地に数回行って、データを作り、あるいは既存のデータを借りて、数回人の話を聞いて、あたかもその場所や社会、その空間の意味をわかったような気に安易になることの弊害
7. 調査の手助けに学生を動員した時に、その調査の意味を学生が理解するには多くの知識と長い時間がかかるのにもかかわらず、それをフォローしきれないことの問題についても、その倫理的問題を強く自覚すべきだと考えている。

さらには、20世紀初頭から文化人類学や社会学などで議論されて来た、

8. 調査を行うことが現地に与える影響の問題

9. 目に見えない社会的問題の意味を十分に研究に反映しなかったモダニズムのパラダイム問題もある。特に反省的に自覚しているのは、

10. 都市や建築の研究でそれらの社会的問題を除外して、科学的・歴史的調査を行うことの弊害である。

現地調査でこれらの問題が派生する可能性は常にある。さらにいうまでもないことだが、単純にフィールドワークをすれば、都市や地域のことが理解できる、あるいは地域の役に立つ、地域の問題に対して発言する資格があるという考えは、自分自身も共同で作業を行う学生たちも、安易に持つべきではないと厳に戒めている。授業時間が限られており、多くの科目を履修しなくてはならない学部生が基本的な情報や理論を学ぶ時間は限られている。現地調査や活動は、多くの場合十分な準備学習も振り返りもできないで、その理解もなかなか深まらないのが実態である。

ではこれらの問題があるという前提で、現地調査や活動を教育と研究を併存させる形式で行うことの意味はどこにあるのだろうか？著者は、都市や建築の理論と歴史を学ぶものとして、都市や地方、建築、住まいの空間的問題に関する工学的研究と、他領域の研究を融合する上での問題と可能性、また限界について長く関心を持ってきた。その結果、現場での体験や調査を、それ自体の科学的資料性を目的とするのではなく、広く比較研究や学際的な理論研究を行うことで理解の枠組みを問い直すことや、調査に参加する者のを明らかにする可能性に興味を持って来た。また、その限界と問題でさえもが歴史的社会的に形成され、乗り越えられてきたことに関心を持っている。その結果、建築家であり民俗学者でもあった今和次郎の研究を通して、彼が20世紀初頭の大きな社会変革の中で農村や都市の現実に向き合い、フィールドワークを様々に展開し、それを表現してきたことと、社会的空間の変動を新たな角度から解釈する視点を模索したことについて研究を行ってきた。そして、結局は彼の現実を見る視点の究極の問いは、目に見えない社会的背景と文脈を感じとることによって、自分自身を知ること、決してわかることのない他者を理解する視点を獲得すること、さらにそれを視覚的に表現することで、さらに開かれた解釈の次元へ展開しようとしたことだと理解するに至った。

つまり、現地調査と活動は資料を蓄積し役に立つ結果を生むことも重要ではあるが、それよりも、調査の経験と対話の中で得た理解を、具体的に表現して現地の人々に公表し、対話を開くというプロセスそのものが貴重なものであり、そこでどのような問いに出会い、自分の視点を再構築できるかが重要なのだと考えている。そこでこの企画では、そのプロセスがどのように構築できるか、そこで著者や共同作業を行う学生たちがどう現実との出会いの中で自分自身の見方や考え方を乗り越えられるか、一步ずつ確認しながら進めていき、学生たちの理解を進める方法や、現地の方々と率直に対話を行う方法を見つけることが目的となっている。これまで繰り返してきた企画の中で、徐々に手がかりが見えてきた。そこで本研究では、教育手法としてのフィールド調査活動を行い、その記録と分析、また作品公開や現地での交流を通して、地域の魅力や社会的問題、また学生や調査者と現地の人々の意識のギャップや地域と都市の関係性の問題、これまで気づけなかった事柄がどのような意味を持つかについて意識しながら活動の記録をまとめたい。

2019 年度活動

月	新庄	気仙沼
2019年 2 月	2018 年度活動報告会及び 2019 年度活動に向けた相談会@ゆめりあ	2018 年度活動報告会及び2019 年度活動に向けた相談会@気仙沼教育委員会
5 月	高校生とのワークショップ ①新庄の魅力を再発見する街歩き ②郷土食作り in エコロジーガーデン以後 11 月まで東高校とスカイプ交流	①南郷復興公営住宅お茶会参加 -食事会打ち合わせ・聞き取り ②小野建蔵 資料整理 ③防潮堤見学・撮影（福島－大船渡）
8 月	新庄東高校の生徒とのワークショップ 新庄の農業と暮らしについての調査 雪調をめぐる偉人の歴史についての調査新庄まつり参加	・南郷復興公営住宅での食事会と入居者の方への住まい調査 - はまらいんや祭り参加 - 防潮堤撮影、自治体 NPO への取材
9 月		方舟祭 防潮堤映像上映 リアリアスアーク美術館
10月	山形映画祭「ファインダー越しの対話—記録が橋渡しする過去・現在・未来—」への参加と作品紹介	
11 月	青山祭 （映像上映・食品販売）	
12 月	収穫祭参加 雪の里情報館 シンポジウム参加	
2020年 2 月	2019 年度活動報告会及び 2020 年度活動に向けた相談会@ゆめりあ	2019 年度活動報告会及び2020年度活動に向けた相談会@気仙沼教育委員会

各地域での活動内容とその成果

【新庄】

+夏の事前準備として

日時：2019 年 5 月 3 日・4日

・テーマ：新庄の郷土料理調査班

郷土料理の継承という課題がある一方で、郷土料理の幅の広さに気づくことができた調査でした。郷土料理スペシャリストの加藤さんがおっしゃっていたように郷土料理は「節々のもの」を使った生活に根差した料理であり、今後郷土料理を継承していくには、現代の生活に合った変化を受け入れていく必要があると感じました。

・テーマ：新庄街歩き班

今まで地域の欠点だと思っていた雪について学んだことで、それを街づくりに生かせるのではないかと思いました。気づいたことは以下の点です。

- ・場所や施設の由来を知る必要がある、歴史があつてこそ新庄である
- ・コラッセの遊び場や子育て教室などの新しいコミュニティを発見した
- ・シャッター商店街、空き地活用の課題

以上のことから、活性化以前に「そもそもそこはどんな土地だったのか」「誰が住んでいたのか」「何をしていた場所なのか」など、その背景や歴史を調べる必要があると感じました。特に、空き地の背景を調べるとともに、活気があったころの新庄の記録を探し、「いつから若者の流失が始まったのか」「いつから高齢化が始まったのか」「人々の暮らしがどう変化してきたのか」「家族の形はどのように変わったのか」ということを古くから新庄に住んでいる方へのインタビューや資料探し、模型や地図作りを通して高校生と調査したいと思いました。



・5月から8月にかけて毎週、5月の活動で協力した新庄の東高校の学生とスカイプで相談し、それぞれの疑問や感じたことを元に具体的な活動の内容を考えるためのディスカッションを継続した。その結果、上記の二つのテーマを一つに絞って、全員で映像を制作することに決定した（参加する双方の学生数が減少したことも大きな要因）。

+夏の活動

日時：2019 年 8 月 22, 23 日

・テーマ：新庄農家聞き取り調査・映像撮影

雪の里情報館を中心として、東高の生徒たちと新庄市の偉人の功績や歴史に関する調査と、市内で農家をしている高橋さん、遠藤さん、奥山さん、石井さんにお話を伺いました。新庄の歴史について

沼野先生から積雪地方農村経済調査所の経緯や、今和次郎やペリアンなど偉人の功績を学ぶことで先人たちが雪国という厳しい環境の中で豊かな暮らしを追い求め研究を重ねてきた努力を知ることができました。鳥越神社が農村演劇運動によって地域に貢献した松田甚次郎の功績を残しているように新庄には地元の高校生もよく知らない歴史的な場所が街に溶け込んでいます。また農家の方々にお話を聞く中で高校生が初めて聞いたというほど、食について真剣に向き合い、健康や栄養について勉強を惜しまず、常に新しい人との出会いを求めて輝いている方々と会うことができました。価格や手軽さで食品を選んでしまう現代の消費者に対して、農家の思いを理解してもらう方法を考えなければならないと思いました。集大成として取材の写真や動画などをまとめ映像を作り青山祭にて上映しました。



夏の活動を通して学生が学んだことと感想を次のように述べています。この学生はこの経験をもとに映像をまとめて12月に新庄市で発表しました。

「5月に地元の高校生と街歩きをしてみると、雪の里情報館や神社、かやぶき屋根の建物など新庄市の「歴史」というものをだんだん理解するようになった。過去を知らなければ未来は見えないと思い、新庄市の歴史や偉人についての調査を始めた。また、農村に根付く強い人と人のつながりがまだ新庄に残っていることに気が付いた。

8月は主に雪の里情報館を拠点とし、歴史について学びながら農業に携わる方やそれに関わるコミュニティについて聞き取りを行い映像を作成した。積雪地方農村経済調査所が新庄に設置された経緯や今和次郎の実験農家の話、民芸運動の話を聞いていく中で、新庄が文化的にとっても豊かな地域であることが分かった。数々の偉人と雪国の雪害によって貧しかった農民たちが豊かな暮らしを追い求め、新庄という地域を活性化し、豊かな暮らしを目指してきたその努力と熱意を感じた。また、松田甚次郎の農村演劇運動の功績が感じられる鳥越神社など貴重な場所が市内にあるのに対して、地元の高校生も知らなかった価値について学べたことはとても良い経験だった。地元の人も知らないような地域の価値につい

てこれからも勉強し、ともに地域の魅力を発見していきたいと思った。

農家の聞き取りに関しては、これまで農業は私にとって身近なものではなく、体力的に厳しいだけの仕事だと思っていたが、新庄の農家の姿を目にしたことで私の考え方は一変した。それぞれが自分の仕事に誇りを持ち、創意工夫を重ね、安全や健康について消費者以上に考え学び続けている姿勢は、「働く」ということがどういうことかを考え直される程パワーを感じるものであった。普段私の周りではこれだけの熱意と使命感を持って仕事をしている人をあまり目にすることがなかったため、農家というものがただの一種の職業なのではなくまさに生き方であるように感じた。値段や手軽さによって自分が口にする食べ物を決めてしまいがちな消費者に対して、こういう方々の食に対する真剣な思いをどう伝えていくかもこれからの課題であると思う。新庄の高橋さんを中心とした農縁ネットワークのような食を中心とするようなコミュニティが他にもないか、そしてどうやって色々な人を巻き込みながら継続的に発展させていくかということについて考えたい。そしてお話を伺った新庄市の農家の奥様方も私が想像していた姿とは違い、勉強を重ね、新しい人との出会いを求めて自分の信念を持っている方々であった。私はこのような地方の女性のパワーや姿をもっと多くの人に伝え、社会全体でもっと活かす方法を見つけたいと思う。

コミュニティの課題を考えたときに、新庄市にも大きな問題があることに気づいた。5月に高校生と街歩きのワークショップを行った際に訪れたカド焼き祭りについて高校生が放った「あれは年寄の行事だから…」という言葉から、都心部に比べると昔ながらの家族のつながりが残っているような地方でも世代間の断裂が生まれていることを学んだ。またそれは私にとっても日々感じることであり、特に都心部の生活では自分の家族や同級生としか関わる機会がなく、ボランティアなどに自発的に参加しない限りは高齢者や子どもなど自分と違う世代に自然に関わることはない。私たちは自分にとって身近な、快適な空間でしか生活しておらず、関わる人やコミュニティはどんどん少なく、どんどん狭くなっているのだ。さらにこのような状況において人は自分の快適な空間、自分の生活、自分の身内のことにしか興味を持たないようになり、社会的なつながりを必要と感じなくなってしまうのだ。私はこのような今年一年間の活動を通じて発見した様々な課題に対し、なぜそのような問題が生まれたかを徹底的に分析したいと考えている。具体的に都心部・地方部における家族の形の変遷についてデータも踏まえながら研究していくつもりである。過去と現在の世帯構成の変化を都市部地方部それぞれで分析し、地方からどう都市に人口が流入してきたかを理解し都市と地方のつながり、若者・中年世代・高齢世代のつながりについて研究していく。」（酒匂彩乃）

また、ある学生は新庄でのフィールドワークを通して現地で学ぶことは何かを問い続けました。「農業を中心に、5,8月に行った新庄の合宿では、地域の産業について知る機会に多く恵まれた。雪の里情報館にて、雪害に苦しんでいた地域を逆手に取り、雪が降っているからこそ発展することが出来る工芸や手芸に力を入れた歴史を学び、農家の方々のお話では、第一次産業の重要性を説き、過多に使用する農薬の危険性、および我々の健康にどう影響するかを伝承する方や、農業にこだわらず、素材を活かしたおかし作りにチャレンジする方、法人農家という新たな生産方法に取り組む方など、いかに魅力を発掘するか日々考えているとの話を伺った。そんな地域の産業を支える方々は、昔も今も新庄というひとつの町の文化の拠点になっていることを学んだ。特に農業は、文化と社会と産業という三つの分野をつなげる役割を新庄で担っていることを感じ、農業に限らず他の地域ではひとつの職がその地域を彩る魅力になることを学ぶことができた。魅力の面で言えば、新庄にいくつも見かけた郷倉や、神社・お寺、また広がる田園風景は、地元の方にとってはいたって日常の風景であり特別なものではないとしても、風

土 や自然の中で人々が築いてきた個性的な風景であり、これらは祭りと同じように、古くから長く受け継がれてきたものであり、これらも文化でありかつ魅力であることを感じた。

合宿前から継続していた高校生との Skype にて、高校生は「なぜ新庄なのか」という疑問を投げられた。5 月の町歩きの際にも、「何もない」という高校生の言葉が多く聞こえた。新庄は山形新幹線が通り、大規模なお祭りには何人も観光客がくる場所であるが、現地で生活する人自体がそもそも地元を知り、胸を張って出迎えなければ、観光客も清々しい気持ちで現地を堪能できない。高校生は Work Shop を通じて、先ほど述べたような地域の魅力を自分たちで発見し、足を運んで目で感じることで、前までの「何もない」という言葉は聞こえなくなるとともに、自分たちの生活する場所を誇るような姿勢へと変わった、その変化を間近で見ることができた。シビックプライドは、個人に限らず周囲の環境にも影響を及ぼすものであることを学んだ。

新庄駅前の商店街は、自分がゼミに入る以前から、シャッターの閉まったお店が並んでいることが多く、活気が感じられないことが問題点のひとつとしてあげられていた。同じく、空き家問題が新庄にも見られている点があった。ゼミに入る前の自分としては、対象の土地の意味を考慮せず、イベントを開けば自然と活気付くという考え方をもっていた。ただそれはのちに述べる現象論であり、表面的に起きている事象のみに焦点が当てられている。あくまで、その対象の土地はそもそもどんな土地だったのか・どんな方が住んでいたのか・何をする場所だったのかなど、場所の特徴・意味・背景・歴史について調べなければ、その場所なりの改善案に導くはずがない。町歩きをすれば解決案が生まれるわけではなく、それから地図やデータ、アーカイヴへと調べる方向を派生する必要性があることを、新庄の合宿にて改めて学ぶことができた。」（海老秀比古）

日時：8月24－26日

・テーマ：新庄祭りへの参加と協力

240年続く新庄祭は世界遺産に登録された山鉾祭りの一つですが、古代の、祭りが終わった後に燃やす仕組みをいまだに残し、地区ごとに自分たちでお布施を集めて屋台を作るコミュニティ主体の祭りの姿を残している数少ない事例です。我々は2008年からずっと上茶屋町に協力参加させていただいていますが、今年も一緒にお布施集めや屋台引き回しを行い、旗を持たせていただく栄誉をいただきました。

【気仙沼】

・テーマ：防潮堤調査

+夏の準備としての5月の活動

日時：2019 年 5 月 5－6日

今まで見えていた海が見えなくなることが人々にどのような影響を与えるのかという景観の観点から防潮堤問題を調査してみようと考えました。5 月はまず防潮堤を「見る」ことに重点を置き、福島県いわき市から岩手県大船渡まで見て回りました。とにかく高い防潮堤に圧倒されながらも、環境や地区の特徴港との完成によって、つくり方が多様だということを学びました。

学生の一人は、2月から5月へと防潮堤を見て回りながら議論して考えが深まったことを次のように買っています。

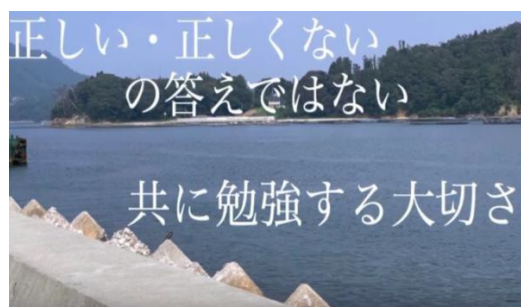
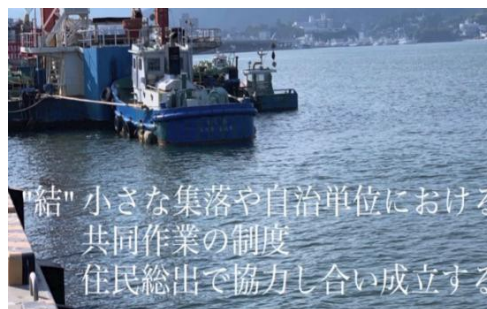
「防潮堤を建設しているという行為自体、国にとっては防災しているという一つの表現方法であるという言葉は印象に残った。震災・津波に備えて、道路整備や逃げ道の作成がベストな手段ではないかという

意見もある中、防潮堤の建設だけで十分であり、満足している国の姿勢に、2 月から疑問を持つことができた。ただ、あくまで時間と人手と費用を考慮した上で、かつよりスピードを求めた結果であることを学んだ（他の地域によってやり方は異なるが）。防潮堤という手段が正しいのか、正解なのかは、建設している側でさえ困惑している状況であり、丸本建設の方は「実験のよう」と表現していた。東北にて行われている防潮堤建設は、単に現代の東北を保護する目的であるだけでなく、他の地域、もしくは未来で襲ってくる震災後の対応にも影響を及ぼしている。ここまでの大掛かりな実験を、自分が生きている時代に進行形で行っていることを知るきっかけとなったとともに、作り手でさえ答えのわからない状況の中、漁業を営む現地の方や防潮堤近辺が生活環境下である方は建設作業する方にクレームを飛ばしてくるという現実、建設者から直接聞くことで初めて知る事実でもあり、かつ両者の感情に同感できることに對し、なんとも言えない葛藤を抱いた 2 月だった。」（海老秀比古）

+夏の活動

日時：2019 年 8 月 4 - 6 日・

5月の活動を踏まえて、8 月には実際に防潮堤問題に向き合われている地元の方々からお話を伺いながら、気仙沼市内の防潮堤をさらに細かく見て回りました。朝日町のようにそばえたつ防潮堤に小窓があるもの見受けられ、海が見えるようにはなっていましたが、住民の方々のお話を伺っていると、海が「見える」ことが重要なのではなく、津波が来る前に波が引くところが見えないことが逃げるタイミングがわからず危険だということでした。また、これだけ多様な形の防潮堤があるのは、地理的な違いがあるためだけではなく、地域での話し合いの過程の違いがあると知りました。建設途中の大谷海岸は砂浜が残るつくりになっています。これらの方にお話を伺うと、長い年月話し合いを続けてきた結果、大谷海岸のアイデンティティである砂浜を残すことができたとわかりました。また調査の過程で得た情報や各自の感想をもとに、映像「防潮堤を通して見る気仙沼」を協力して制作しました。



学生の一人はその現場調査で感じたことを次のように述べています。

「防潮堤の映像を撮りながら住民の話を聞いていく中で行政と住民の合意の問題や、防潮堤の将来性の問題があることを学んだ。今まで海とともに暮らしてきた住民が防潮堤によって完全に分離されてしまうことでどのような影響があるのか、防潮堤を求める住民と反対する住民の合意をどう行うのか、予算の限度がある中で建設した防潮堤をこれから維持できるのか、これらの問題は 1 年の活動ではまだまだ勉強不足でありこれからも学び続けていきたいと思う。」（酒匂彩乃）

またもう一人の主として映像製作の役割を担ってくれた学生はその見学と調査、映像制作の中での学びを次のように語っています。残念ながら彼は、おそらくこの作業の負担の大きさの故に、継続して取り組むことはやめて、文化演習に進みませんでした。もちろん調査と研究、映像制作の全ての段階で指導を行い、上級生のサポートもありましたが、教育の目的としてあまりに大きな課題に取り組み、自分で考えることを促しつつ、他者に対してもわかりやすく表現することを求めるのは、学部の2年生の段階では無理があったのかと思います。

「合宿前から調べてはいたが、気仙沼市で防潮堤を間近に見ることで、地域ごとに形・大きさ・素材・領地の取り方・長さ・特徴など、全くもって異なることを感じる事がまずできた。海が見ることが出来ないという意見を考慮し、小窓のついた防潮堤を建設した場所や、地面と垂直に建てることで海と反対側の土地を大きく確保した場所など（具体例を挙げるときりがないため省略）。なにより現地で感じた一番の衝撃は、壁の背後の土地の現状。各場所によって状況は異なるにしても、あまりにも放置された土地が、震災から 8 年経過しているにもかかわらず多く見られる事実には呆気に取られた。

8 月の合宿にて伺ったお話の中で特に印象に残っていることは、大谷海岸の防潮堤建設へのプロセス、および結子という概念の 2 つ。もともと海水浴場として名前が知られていたという大谷海岸が、震災後の防災方針を行政に一任することはなく、官民一体となり、かつ土地の管轄を行う JR などの企業とも何度も話し合うことで、両者が譲り合う方針の形を見出した。まちづくりや景観にとって行政と住民が一体になることが重要であることを、当事者から具体的に伺い、かつ現場を直接みるのが貴重な経験となった。実際に大谷海岸は住民の視点から海が見えるような防潮堤を建設している最中であり、それまでのプロセスは県内にとどまらず、日本中が手本にすべき事例の一つではないだろうかと感じた。もちろんそれまでの過程には、いくつもの合わない意見と対面する必要がある、その分信頼関係を他のコミュニティや行政と築かなければいけないため、単に文章や画像では表現できない精神的苦難があることを、まさに議論を重ねたご本人からお伺いすることで学んだ。また、本吉で伺った話では、コミュニティという言葉自体は最近広まったわけであって、昔からコミュニティという言葉を使っていなかったという話も印象的だった。代わりに結子という概念が存在し、先ほどの大谷海岸の事例はまさに、昔からの結子の考え方の表れともいえると考えた。場所は異なるが、新庄での合宿で、農家は一家のみで行うわけではなく、農家ネットワークが存在し、周囲の農家さんと密に連絡を取り合い、情報を提供し合い、お互いを助け合い、ともに宴をする関係があると伺った。気仙沼も同じように、農家間のつながり、漁業を営む漁師間のつながり、周辺地域のつながりなど、気仙沼独自の人と人との関係が現代にまで影響されていることをこの身で感じる事ができた。

合宿前と後で、防潮堤に対するイメージは多く変わった。もともと防潮堤に対して、一番の問題は住民にとっての景観を損なう点であり、付随する問題点も景観が関連するものだと考えていたが、実際は違った。気仙沼といえば海のイメージが浮かぶように、漁師や飲食店それに海水浴する方々や海に近い住民、気仙沼に住む方々は代々海という自然と共に生活をしていた。その間に何 m もの人工物を建設する行為は、単に景観を損なうだけでなく、自然と人間の分離であり、共生の分断を意味する行為とも言い換

えることができる。防潮堤建設は、一つの景観問題に限らず、気仙沼の職やコミュニティなど、あらゆる分野に直結して影響を及ぼす。正しい解決方法と言い切ることが不可能な防潮堤建設に、自然との共生を壊された住民が気仙沼にいることを知った。そして、防潮堤建設があらゆる地域で終了してきている現在、放置された土地をいかに活性化させるか、いかに自然に戻すかも課題であり、それを現代に生きる我々は無視してはいけない課題であることを認識しなければいけないと学んだ合宿だった。」（海老秀比古）

・テーマ：コミュニティ調査

+夏の準備としての5月の活動

日時：5月7日

今までゼミで続けてきた南郷復興公営住宅でのお茶会への参加や、昨年行った復興公営住宅の住みこなし調査をもとにして、福祉とコミュニティの関係や空間とコミュニティの関係について調査をするためにお茶会に参加し、住民の方々に経験のヒアリングをしました。また夏の食事会の開催のための打ち合わせをしました。居住者の方々が普段から慣れ親しんでいるメニューを共に作る活動を行うために、メニュー調査をしました。

+夏の活動

日時：8月1－3日

夏の合宿では、最初に南郷復興公営住宅の周辺の自治会の方々とハマラインヤ祭りに参加しました。それに引き続いて、気仙沼市社会福祉協議会や鹿折南まちづくり協議会、南気仙沼復興の会といった復興まちづくりの中心を担われている団体の方々と若者の場を提供されている一般社団法人底上げさん、障がい者支援・子育て支援を行っていらっしゃる一般社団法人かもみ～るさんにお話を伺いました。空間とコミュニティの観点からは、南郷復興公営住宅と鹿折南復興公営住宅のコミュニティスペースを比較した際に、南郷住宅では広く開けた空間があるのに対して、鹿折南住宅は区切られた部屋が並んでいたのが印象的でした。使い方にも違いがあり、南郷住宅では10名～15名程度のお母さん方が中心に集まっているお茶会が週に1回開催されている一方で、鹿折南住宅では6名程度のお父さん方が中心が毎日集まって麻雀を行っていました。他の使われ方もあると思いますが、空間のつくりや仕掛け方によって集まる方々に違いがあることがわかりました。ただ共通することとしては、どちらにしても毎回一部の方々が集まられており、限られたコミュニティであるということです。今後はより広く緩くつながるコミュニティのあり方が求められると感じました。



この活動を通して学んだこととその感想について、学生の一人が次のように述べています。

「コミュニティ形成の支援を行っている団体や復興公営住宅での取り組みを見て、一部の方々がどうにかしてコミュニティを作ろうと仕掛けたり、土台を作ったりしているよう感じました。鹿折南復興公営住宅では、鹿折まちづくり協議会が自治会立ち上げに尽力されたこともあり、自治会長をサポートしながら中心となってコミュニティを作ろうと仕掛けを施しています。また、気仙沼市社会福祉協議会は「絆再生プロジェクト」という事業を行っており、市と協力しながら地域のサークル活動を支援しています。こういったように法人、行政が懸命に地域コミュニティ形成を進めています。中にはなかなか集まりに出てこれない方にどうにかして出てきてもらおうと頭を抱えている方々もいらっしゃいました。もちろんそういった方々につながりは必要だと思いますが、集まることが必ずしも正解ではなく、無理に集まらなくてもよいのではないかとも思いました。つまり、ある程度大きな団体がコミュニティ形成を促そうとすると、どうしても個別的な対応がしづらく、地域住民の視点に立った取り組み、集まりづらい方々が繋がりを持てる他の手段を考えることから外れてしまう恐れも考えられるのではないかと感じました。

一方で、住民が主体となった集まりとして南郷公営住宅のお茶会を見てみると、佐藤さんが中心となって会を運営されています。もちろんそういった中心人物は必要である一方で、一人に依存した取り組みは持続性という観点から弱い部分があります。ただ、お茶会でのつながりはお茶会以外でも反映されており、会が終わった後に渡り廊下で数人のお母さん方が集まってお話している姿が見受けられたり、他の日にそれぞれの家を行き来することもあると伺ったりしました。ただその場限りのつながりで終わるのではなく、そこから波及して住民の方々が自分なりのつながりを作れている点で理想的なコミュニティ形成の過程の仕方だと考えました。

つまり、各団体や中心人物が企画しているイベントはあくまで「きっかけ」であって、そこから広がる小さなつながり、個々のつながりができることが重要なのではないのでしょうか。こういった個々のつながりは、つながっている本人同士以外から見えにくく、特に公的な団体ほど把握しづらい部分だと言えます。それが「独りよがり」のように見えてしまう取り組みにつながりかねません。なかなか集まりに出てこれない方々の中にはもともと身体的に参加できない方加できない方、ただ単にもともとそういった集まりは好まれない方など状況は様々です。特に集まるもいれば、精神的に参ことを好まない人に対してどんな企画を打っても、集まってもらうことは厳しいでしょう。まずは顔見知りのなることを目標に、例えば回覧板を回すときに挨拶をするような仕組みに変えたり、集まりによくいらっしゃる人が中心となって挨拶する習慣を作ったりするなどの取り組みができるのではないのでしょうか。集まること＝コミュニティというイメージを壊す必要があると感じました。またこのようなコミュニティの希薄は被災地に関わらず、都心でも問題です。むしろ被災地のようにコミュニティ問題に多くの人を巻き込んで真正面から取り組んでいない点で、被災地よりも深刻なのではないかと考えました。」（渡邊菜摘）

またもう一人の学生は次のように意見を述べています。

「気仙沼では 5 月に初めて市内を回った際は工事が進んでいるのを見て震災当時を知らない私は復興に向かっていてのだと感じた。しかし町内会の方や商店街、行政の方に聞き取りを進めていく中で、復興とは道路の復旧など目に見える部分だけでなく、コミュニティの再興や市民の心に向き合っていく目には見えない部分を忘れてはいけないのだと気がついた。

復興公営住宅や各自治体に訪れた際はコミュニティ内でリーダー的存在となり、積極的に他の住民にも声をかけている高齢者の姿を目にし、都心部では消えつつある昔ながらの地域組織の構図が残っていることを知った。南郷復興公営住宅では佐藤さんを中心に 20 名程度の入居者の方々が週に一度の

お茶会に参加されており、自分たちでつながりを深めていこうとしている姿勢が見えた。このように行政頼みの体制ではなく、住民自身が自分が地域の一員であることを自覚し、リーダー的存在となり他の人々にも呼びかけていけるような人材をこれからどう見つけるかどう育成していけるかがこれからのコミュニティの課題であると感じた。

また同時に復興公営住宅のサロン活動や集まりに参加せず、地域とのつながりが薄くなってしまっている入居者が多くいることも学んだ。こうした事態の背景を私なりに考えてみると震災復興の過程で度重なるコミュニティの分断があったことが原因に挙げられる。被災者は震災後避難所、仮設住宅、復興公営住宅など数々の場所を転々とするのを余儀なくされ、その行政の割り振りはそれまでの自治体やコミュニティを完全に無視したものも多く、孤立してしまう入居者も少なくない。実際に8月に南郷復興公営住宅でお茶会に参加している入居者の方々に住まいについての聞き取り調査を行った際には、「震災後様々な場所を転々としてやっとここに落ち着くことができた」という声が多かった。震災前の自分が慣れ親しんできた環境が一変してしまった苦しさは計り知れないものなのだと感じた。また全体の公営住宅入居者の50%以上が高齢者、さらに独居率が30%以上である現状を考えると、支えとなる地域のつながりをどう再構築するかということを考える必要がある。行政のサポートはもちろんだが市民同士がつながり支えあう継続的な仕組みを作っていく方法を私はこれからも模索し続けたい。この課題について考えることは災害が多い日本において、自分と自分の地域を守っていくためには必ず考えなければいけない。具体的に、来年度は復興公営住宅内だけでの活動ではなく、入居者とその周りの住民をつながられるような取り組みを行いたいと考えている。」（酒匂彩乃）

・テーマ：ラジオを通しての地域との交流

日時：8月2日

ラヂオ気仙沼局を訪問し、秋の番組を2週間に一度30分ずつ放送させていただき相談をしました。先方の要請は、気仙沼でのゼミのこれまでの活動を紹介すること、現在東京の人々や学生さんたちが気仙沼や被災地の生活に対してどのように感じているかを紹介することでした。

結局10月から1月まで6回放送を行いました。収録したデータを先方の方に編集修正していただき放送したので、自立したものではありませんでしたが、時間のあったラジオ活動希望者に任せ、夏の活動を同行してもらい、情報収集を共に行うことで実行しようと考えました。

最初はよく努力していたのですが、編集の経験がなくて作業が大変な割には先方のダメ出しも多かった事、そしてこちら側の意識がラジオは好きだけでも公共の電波に乗せる内容を作るための責任があるということが十分理解できなかった結果、「好きにやれないならやらない」と中断することが発生しました。なんとか他のメンバーの努力でリカバリーしましたが、やりたいからやるのでいいのか？など、学生の教育としての外部活動の無責任さが露呈した出来事であったと共に、放送するための内容をこちら側がきちんと持っていないことの怖さを思い知る経験となりました。メディアとしてのラジオには大きな可能性を感じていますが、学生が行うことの難しさと、情報収集と編集の体制づくりやコンテンツづくり、諸々の技能の向上に時間をかけてから、再チャレンジしたいと思います。

夏に続いて行われた作品公表と現地との交流、東京やその他の場での公表と交流の機会

・9月 方舟祭における映像上映と地域交流

例年行っているリアスアーク美術館での方舟祭への参加として、夏の防潮堤調査で得た情報を映像化して発表させていただきました。完全な正解のない防災対策として防潮堤には多くの論議がいま

だに続いています。できるだけ情報を学び、できるだけ実際の現場を見学し、できるだけ多様な立場の方々のお話をしっかり伺って、自分たちの単純な思い込みを排して、でも率直な感想は大事にして問いかける、そういうドキュメンタリー映像の意味を問うような映像を作ることを努めました。

その公表の機会を得た学生のうちの一人が振り返った感想です。

「9月のリアスアーク美術館での発表のためのドキュメンタリー映像作成は、今まで本格的に映像を編集したことのない自分にとって、辛い試練であったと共に刺激的であった。ドキュメントはあくまで記録・事実であり、自分の感情や合宿にて感じた心情を表現するための道具ではないことを意識した上で製作する必要があるが、現地で鑑賞していただける方々から反感を買ってしまう恐れがある。常に神経を張り詰めて作業を続けた。この映像作成があるからこそ、合宿で広く情報を得ようと試みることができた。かつ観て頂く方に伝わりやすい映像や音声を編集することは、観た・聞いた経験を自分の言葉として受け入れる必要があり、より事例に対する理解が深まった。そして、再び現地を訪れ、映像に対する意見を頂くプロセスは、単にやりがいを感じることができるだけではない。当事者でないよそ者であっても、気仙沼を想い、考えているという態度を映像のクオリティに表現することが必要かつ可能であり、そこから信頼がうまれるからこそ意見を頂くことができると学んだ。一つの映像作品を作成した経験は、課題を改めて振り返る機会にもなり、かつ信頼を生成するものでもあることを知る機会にもなった。」(海老秀比古)

・10月 山形ドキュメンタリー映画祭における「ファインダー越しの対話—記録が橋渡しする過去・現在・未来—」研究会への参加と発表

映像社会学や映像人類学の研究者たちと共に、映像を制作することとそれを通した多様なコミュニケーション、まちづくり、教育への活用とその問題について議論を行った。大学教育の中で現地活動に際して映像制作により事象の理解を深めることを行っている事例が少ないことを指摘され、我々の学びのスタイルの問題と可能性について学際的な議論を行うことができた。また理解しきれない現象に関わり続けることの意味を問い続けている著者にとって、非常に示唆に富む機会だった。そこでの議論についての報告は次のとおりである。(報告書よりの一部抜粋)

「総合討論では、主に制作者の視点から、映像記録と記憶を想起する作品づくりについて討論が行われた。例えば、黒石氏からは「記憶」と「記録」にかかわる作用や被災した当該社会への影響、さらに被災地域の外部の人間であり「他者」として関わり続けることによる表現の可能性が語られた。また是恒氏は、連鎖し繰り返される自然災害に対して媒体にもなり得るドキュメンタリー映画の可能性や、芸術家が作品として非被災者の人びとを取り込むことで生まれる記憶の作用について話がなされた。さらに、映像作品の持つインパクトによる、記憶の固着化についても批判的な討論が行われ、映像を単に伝承するのではなく、映像を通して想像力を伝承する必要性が指摘された。そのため映像作品の制作者は見る人に「余白」を残す作品をつくる必要があること、そして固着化したイメージを解き剥がすことができる作品づくりを通して、制作者と視聴者がつながる期待が高まることが討論された。その営為は、制作者・芸術家だけではなく研究者の研究・報告活動とも非常に類似点が多いこともわかった。」(工藤さくら(東北大学大学院文学研究科・学術研究員))

・11月 青山祭における展示と食品の販売会

5月、8月と続けた活動とそこでの作品制作を青山学院の同級生たちに紹介し、東京での地域理解に役立てようと、青山祭での展示と映像紹介、山形の農家さんをお招きしての食品紹介を行った。その経験について、学生の一人が記録した感想は次のとおりだった。

「私たちの食を支える農業」という題目で青山祭で上映した。健康の重要性や農家の輝く姿、高校生の真剣な姿勢を東京の人にも伝えたいと思い、実行したことで来場者アンケートで「農家のイメージが変わった」「食についてもっと考えたい」などの声をもらうことができた。しかし映像を作るだけで私は本当に新庄市に貢献できたのだろうか。地方の高齢化や過疎化について関心がないどころか、自分が生活している地域のコミュニティについても無関心な人も多い中で、人とのつながりの大切さを意識することはかなり難しいことであるということを感じている。地域に自分の居場所があると感じることができる支えあいの地域社会の実現について考えることは、人の多様な生き方や抱えている苦しみについて理解することであるということに気づいたことが自分にとって 1 年間の活動の重要な学びであったと思う。この学びを自分だけのものにせず、地域の人を巻き込みながらともに共有し、形を残してそれを都市の人にも理解して行動してもらうということが来年度の大きなチャレンジだ」（酒匂彩乃）

・12月 新庄市における映像上映

2019年度に工学院大学の今和次郎コレクションの資料が一部新庄市に寄託された。その管理と維持活用について、著者は今後関わっていく予定であるが、今和次郎の研究者として、その寄託事業を記念するシンポジウムで講演を行った。その際に、本学の学生が制作した「私たちの食を支える農業」と、ワークショップでコラボをした東高校の学生たちが制作した映像とを合わせて上映し、学生たちのトークセッションを設けていただいた。東京の学生が農業のコミュニティを作る役割や人々の人生そのものに関わる産業であることに気づいたことを手掛かりに、現地の高校生たち自身もそれに気づき、自分自身の自信につなげていった過程が窺える機会となった。地域交流の新たなあり方を示せたと思う。

地域活動や現地調査がどのような意味を持っていたかについての学生の感想：成果と今後の課題

最後に、文化基礎演習で 1 年間地域活動を共にしつつも、活動の負担とその成果に納得できずに地域活動をやめた学生たちが、それでも 1 年間の活動で学んだことを述べているので紹介する。

「ゼミに入る前と後で「足を運ぶ・時間を掛ける」ことの重要性をこの身で感じる事ができた。上記に記述した学びは、ほとんどが気仙沼・新庄合宿にて感じたことであり、改めて振り返ると、現地に足を運ぶ、または直接お話を伺うことで得ることのできる学びがほとんどである。黒石ゼミが 1 年間になんども合宿を繰り返す理由の一つには、たとえ些細なことであっても、図書やパソコンから得る情報とは異なる報酬を直接自分の目で見ること、肌で感じるができるためであり少しでも信頼してくださる現地の方々の心情が伝わり、達成感に満ちた経験は、時間をかけて制作した結果であり、今後もこの価値をけっして忘れずに生活しなければいけないと考えるようになった。」（海老秀比古）

また、もう一人の学生は、地方の出身者であるために余計、この企画での地方の現地活動の意味を理解する上で、自分自身の固着した意識を乗り越える苦労を経験しているようだった（何の役に立つのか、どう使えるのかという問いを常に繰り返していた）。

「このゼミに入ってよかったことは、地元ではない地方をみる事がすごくいい経験になったことである。多少、人口規模や行政が違ったところで地方が抱えている問題は同じなのである。人口減少、少子高齢化、若者の都会への流失。これらの問題を否定することはできない。地元を含め、地方を観て抱いた印象がある。地方の人たちが少子高齢化や若者の人口流失に対して 何の対策も取っていないわけではない。むしろ地元の人たちが一緒になって町おこしをしようとしている。だけれども、うまくいかない。もはや地元の人たちだけで、特に行政が中心になってやっているだけではそう簡単に地方は創生できないのでは

ないだろうか。民間がリスクを取って行政や市民と連携しながら、また、違う地方や都心の企業と協力してやっていかなくて はならないのではないだろうか。そのような意味では地方創生は地方だけの問題ではない。そう考えるに至った。私はゼミの活動中に、将来は地元に戻り、地元を創生したい。そのために ビジネスを興したいと時々言った。だが決して、ビジネスを興すことが目的ではない。そうではなく、地元をよくするためにはどうすべきかと考えた結果として、ビジネスを興すことが現在の最適解だと考えるのである。

このゼミで最も心に残っていることは何と言っても、新庄や気仙沼の地元の人たちと同じ時間を過ごしたことである。新庄の郷土料理について地元の方たちの声を聴く中で、同じ郷土料理だとしても様々な違いを見られたのは興味深かった。また、地元の方とコミュニケーションをとること自体も楽しかった。三重出身だと伝え、同じように周りは田んぼと畑ばかりあると伝えると、収穫の話などをしてくれた。

地元の高校生と話すと、新庄を出たいと言っている子は少なからずいた。いやというほど気持ちはわかるし、出るべきだと思った。若い人たちが都会に行くことをいくらかの大人たちは嘆くが、それは、それまでの大人たちのとってきた政策の結果でしかない。また、若いうちに様々な価値観に触れることは、これから先の人生の選択肢を豊かにするものであろう。

郷土料理を実際に作ったことは楽しかったし、おいしかった。しかし、私の地元の郷土料理は何であろうか、ということに気が付いた。これまで考えたこともなかった。地元に戻った際に、祖母や母に聞いてみようと思う。食、食べることは当たり前すぎて、日常生活で特に考える機会がなかった。だけれども、一度足を止めて考えてみるとかなり深いものであった。普段 当たり前だと思っている食生活は様々な歴史を経て今日の形に至るのだと身をもって知れた。食べることは文化そのものである。文化を考えると、日常とは異質なものに会おう、例えば 海外に行くなど、か、一度意図的に足を止め、深く調べ、考える必要があるのだと思った。食べることは面白い。その上に、文化的背景を知ることができるとさらに面白い。実はそういったツーリズムがある。ガストロノミーツーリズムである。まだ日本ではそこまで広まっていないが、ヨーロッパ、とくにスペインのサンセバスティアンなどが有名である。そういった目で 見れば、地方にはまだまだ発見されていない文化が数多くあるのではないだろうか。東京などの都市は、国際競争などにより、生活や文化が均質化されている部分が見受けられる。けれども地方には、いまだに残っている習慣や文化がある。もちろんいい面もあれば、悪い面もある。だがそれを比較し、考えてみることは面白い。私は東京に来て、地元の良さに初めて気づくことができた。あんなにも嫌いだった地元が少し好きになれた。

地方は衰退しているといわれている。実際そうである。けれども、可能性がなくなったわけではない。いや、可能性はある。これから多くの人を幸せにできるという可能性があるのである。都市と地方は、都市—地方の関係性ではなく、一つの街と街の関係性になるべきだ。私はそうしたい。都市でできないこと、都市とは違う価値を創りたい。これから少なからぬ地方のまちが消滅していくだろう。それはしかたのないことだと思う。資本主義社会の中でそれを避けることはできない。だが、その競争に取り残された個人には手を差し伸べるべきだと思う。これからの社会は問題が複雑に絡み合い、かつ、変化が激しい時代となる。例えば、グローバリゼーションがそれらの起因の一つとなる異なる価値観、文化的背景を持つ人々が国境を越え、協力しあったり、競争することとなる。そうすれば、これまでの価値観だけでいられないし、考え方も変えていかなければならない。異なる価値観を持つ人々とコミュニケーションをとる際、自分たち

の国の文化や歴史はもちろん知っておくべきことであるが、相手を理解しようとするには相手方の価値観の根底、つまり、相手方の歴史や文化についても知っておくべき必要がある。また、新たなイノベーションを生み出そうとするとき、イノベーションとは異なるものの組み合わせによるものであると考えるが、多様な視点で考える必要がある。そうしたことに對して必要な能力は、何らかの専門性よりも、視点の多様性であったり、論理的な思考力であると考え。」（井戸翔吾）

この二人の学生が、明確な答えのない、教員が説明するだけではカバーしきれない現場の問題を、自分で見つけることを求められる地域活動が、果たして自分にとってどのような意味があるのかを理解することに苦しみながら学んだことが伺える。理解した・納得したという地点に到達することはできなかったし、自分なりに主体的に学びつつ現地活動を行うという意欲にも到達しなかったようではあるが、そこには著者の指導者としての問題と共に、持続性のある学びを現地活動で行うことには、強固な意思と、多大なエネルギーが必要なことがわかる。しかしながら、この二人の学生においても、現地調査と活動、発表と考察という一連の流れが、自分を見直す手がかりとなる経験だったこと、そしてそれが一足飛びに得られた理解ではなくとも、これはよかった、という体験的な事柄への思いの中で、徐々に自分の意識を見直す手がかりを得ていることがわかる。

